

保健科学研究科 修士課程 担当教員・科目概要

		科目名・分野名	概要	担当教員
特論科目	共通必修科目	保健科学特論 医療衛生学分野	医療衛生学では個人や人間集団の健康を保持するための予防医学、健康科学の概念を学習する。具体的には医療現場における特定の集団の健康管理の意義、対人保健活動を通しての予防対策、ならびに医療経済に関する包括的な知識について学ぶ。また、本分野では予防医学の体系化に必要な遺伝子（DNA/RNAマイクロアレイ解析）、タンパク異常（プロテオーム解析）に関わる臨床検査の概要についても学習する。さらに、物事を科学的な視点で捉える生命科学としての医療衛生学の位置づけについても考察を加える。	池脇 信直
		保健科学特論 保健医療福祉学分野	医療関連専門職として、保健・医療・福祉のシステムや制度を学ぶことは非常に重要である。わが国では、憲法第25条第2項に「国は全ての生活面について、社会福祉、社会保障および公衆衛生の向上および増進に努めなければならない」とあり、種々の保健・医療・福祉サービスを国家が行う際の最も基本的根拠となっている。しかし、現実には保健医療福祉の現状は費用保障制度の大きな影響を受け、種々の課題が山積している。その中で医療専門職者は知識と経験を持って医療の質を高めなければならない。そこで本科目では「医療の質」の3つの要素 ①技術的要素 ②人間関係要素 ③アメニティ要素を理解し、特にそれらの評価について学習することを目的とする。さらに各専門職分野における医療の質の向上のための現状分析、課題を考察学習することとする	内田 冴子
		保健科学特論 健康科学分野	保健科学分野は広く、解剖・生理学や公衆衛生学などの基礎科目、臨床分野の専門科目と関連しており、作業療法士や理学療法士の養成課程では必修科目とされていない栄養学も含まれてくる。本講義では、生活習慣病と医療費の動向を把握した上で、単に疾病の症状や診断基準を知識として覚えるだけでなく、生活習慣病の増加の社会的背景を理解する。次に、運動療法の効果について学習する。臨床分野で用いられる運動療法は機能回復を目的としているが、予防医学分野では健康維持・増進を目的としている。運動の種類、強度、頻度によって生体に与える反応は異なる。	樋口 博之
		保健科学特論 環境保健学分野	現代は予防医学の時代といわれている。一方、自然環境の大規模破壊や経済至上主義により、新興・再興感染症や我々を取り巻くストレスによる健康への影響が課題となってきている。本講では日本における近代医学以前の健康維持システム、感染症との闘いと制圧の歴史と近代公衆衛生システム構築の経緯について理解を深め、「清潔の時代」といわれる現代社会の健康に対する概念やストレスのような新しい環境保健上の課題について考察します。	大津 隆一
		保健科学特論 QOL学分野	保健科学領域におけるリハビリテーションの視点から、研究活動の基礎的態度を養うことを目的として開講する。特に、リハビリテーションが実践科学であることから、研究における論理性や普遍性をもたせることが難しい領域でもある。このことを踏まえながらどのように科学性をもせるかを考える機会にしたい。特に、人が人らしく生きていくことを究極の目標とするリハビリテーションでは、生きる視点をどのように設定するかが大きな課題でもある。ここではQOL (Quality of Life) に視点を置いて理論づけしていきたいと考える。なお、リハビリテーションの研究対象が幅広いことから、指定された教科書以外に関連文献を読んで、課題に対する自分なりの考え方を必ず作っていくよう心がけて欲しい。	福本 安甫
		保健科学特論 心身障害学分野	心身障害学とは障害科学であるといえる。障害科学とは、「障害」に関わる近年の社会状況に新しい枠組みで対応することを鑑み、障害当事者と社会全体に貢献できる、教育学的・心理学的・生態学病理的・福祉学的な理論、実践、臨床に関する学問の総体といえ、学際的な学問である。リハビリテーションの分野でも、このような発想が求められ、リハビリテーション連携科学が発展しつつある。リハビリテーション連携科学は、サービス利用者の立場に立ち、リハビリテーションの各分野間、各種専門職種間、関係機関の連携を確立、促進するための理論や実践をまとめる科学である。そのひとつの鍵が、当事者性である。この当事者性を具現化したものが、セルフヘルプグループといえる。本特論では、リハビリテーション連携に果たすセルフヘルプグループの役割について考察し、セルフヘルプグループの研究的課題を把握することを目的とする。	松山 光生
		保健医療情報解析学特論 医療情報学分野	修士論文執筆のための情報検索・収集、あるいは臨床活動上必要な情報検索・収集、さらに臨床研究の成果発表（学会発表、論文執筆等）が可能となるよう、主として各種の文献データベースやウェブサイトを活用するためのノウハウ、およびプレゼンテーション技術の習得を目指す。そうした情報検索・収集およびプレゼンテーションの実践を通して、情報、ネットワーク、コンピュータ等に関する基礎概念についても理解を深め、より高いレベルでの情報活用を目指す。	山田 弘幸
		保健医療情報解析学特論 医療統計学分野	近年の医学・保健科学領域の研究は、研究デザインの確立が重要視されている。また、SPSS等の統計パッケージを用いることにより、簡単にパーソナルコンピュータ上で統計解析ができる時代となった。しかし、適切な統計手法の選択とその使用は、各研究者に委ねられているため、統計学的な知識の習得はますます重要になっている。そこで本特論では、母集団とサンプル抽出、データの種類の、データの分布等の統計学的知識の基礎から各統計学的手法、調査法のデザイン等の応用的知識までを学習し、修士論文執筆に役立つ統計学的知識について学ぶ。	原 修一
		保健医療情報解析学特論 医療ネットワーク情報学分野	医療現場におけるコンピュータの活用には、患者検査データ管理・統計処理による治療方針の決定、治療装置のネットワーク化による装置、治療条件の一元管理、カルテの電子化と保険請求の自動化、医師ネットワークの活用による治療の最新情報共有化などがある。その中で、本分野ではおもにカルテの電子化を中心としてシステムの現状、その活用方法、利点と欠点についてレポートをまとめ、各自なりの意見と今後のあるべき姿を明確にする。病院、クリニック勤務者の場合には自施設でのシステムを調査するなど、極力現場に即して役立つ内容のレポート課題とする。	竹澤 真吾
	保健医療情報解析学特論 安全情報管理学分野	医療の高度化に伴い医療事故が多発している。その背景要因としては、安全管理の立ち後れ、危機管理意識の欠如、対象疾患・対象患者の拡大、仕事、労働内容の変化、医学教育・医学研修の不備、社会・経済体制の変化などが指摘されている。医療事故の多発分野としては、手術、麻酔、化学療法、救急医療、集中治療、産科、輸血、移植、などの部門や、さらに新しく導入された治療法、院内感染、医療機器関係などに原因することが多い。また、経験の少ない医療スタッフや、新しく導入された技術などに関係して医療過誤が生じやすい。これら医療事故防止のためには、まず、事故内容の把握や対処方法など情報管理が必要である。本講座では、医療における安全情報の活用について理解を深める。	戸畑 裕志	
共通専門選択科目	発達保健学特論 遺伝学分野	生殖医学や周産期医学の発展にともない、低体重児の出生数や神経学的後遺症をともなう児の数が増加しています。新生児の死亡原因のなかでは、感染症をおさえて先天異常が1位をしめています。個々の先天異常は発生頻度が低い、種類が多いのが特徴です。一方、障がいをもった子どもではなく、健康な子どもを少なく産んで、育てようとする動きもあります。そこには、医学的、倫理的問題がふくまれます。そこでこの科目では、これらの問題についての課題をまとめます。	園田 徹	

		科目名・分野名	概要	担当教員
共通専門選択科目	特論科目	発達保健学特論 コミュニケーション発達学分野	言語・コミュニケーション能力の発達と評価方法について専門的な知識を修得することがねらいである。言語の性質とその障害について理解した上で、初期の言語発達と評価方法について体系的に学ぶ。まず、言語獲得理論と言語聴覚障害に対するアプローチを整理する。これらの知識を踏まえて、初期の言語発達について学習を深め、形式と機能の相互作用と統合について考察する。さらに、言語・コミュニケーション能力の評価方法の目的、方法、結果の解釈について理解する。	倉内 紀子
		成人・老人保健学特論 呼吸・循環機能老化学分野	加齢に伴う主要臓器（循環器、呼吸器、代謝内分泌臓器）の障害をここでは取りあつかう。加齢に従い、各種の臓器機能は低下していくが、その過程が、急性、亜急性そして、多くは慢性といった経過をたどる。その中で、代償的機転が作用して維持していくこともある。その変化は徐々に認められることも多く次の診断、次の治療を必要とするのかを考えることが、個人、家族、社会、医療経済を含め重要となってくる。個々の臓器障害が生じていく段階で、加齢に伴い、個人、家族、社会、医療経済にあたるインパクトを学ぶ。	吉武 重徳
		精神保健学特論	精神症状の正確な把握は治療・リハビリテーション・介護を行う上で極めて重要なことである。そこで以下の課題を行う。 ①医師同様に各立場の診断ができるようにする。 ②診断と治療は切り離すのではなく、一体という理解をできるようにする。 ③精神科医が病態をどのように診断し、どう治療するかを理解を深める。 ④治療を効果的にする為に、治療に加わるスタッフ（家族も含む）は全員が協力的、協動的であることが必要である。 ⑤治療者の技術を向上させる為に、治療者自身の自己理解を深めるようにする。絶えず治療技術の向上と援助技術の向上に向けて努力し続ける人材育成を目指す。 ⑥加えて、精神予防学についても講義する。	矢花 美美子
		形態学特論 身体運動学分野	学習は方法と実践に重点がおかれ、知識（内容）はその結果として付随するものであるという観点で進める。運動を中心に人体の構成とその作用を厳密に定義できることが肝要であり、そこを起点として人体の機能を再吟味する機会にしたい。これらを踏まえた上で、臨床的に必要と思われる機能再生の生体学的な発展、行動あるいは動作能力の向上に寄与できる思考能力の開拓に発展させる。さらには、将来的に大きく発展するであろう人工再生器官の現状と可能性についても正しく認識し、対象となる人（患者）のQOLの向上に必要な能力を備えた人材の育成を目指している。院生の専門領域によって、その内容は若干、変更する。	岩本 壮太郎
		形態学特論 分子細胞生物・微細構造学分野	ポストゲノム時代を迎え、人体の構造と機能に関する分子レベルでの知識は急激に増加している。保健科学の分野であっても、このような最新の情報を正確に理解し、それぞれの専門分野の臨床的な問題にそれを応用していくことが求められている。ここでは、それぞれの専門分野に関連する細胞・組織を選び、その微細構造と機能について詳しく学習し、分子レベルで考える。こうして、それぞれの専門分野に関連する最新情報に含まれる細胞や組織の画像を正しく読み解く力をつける。	川野 純一
		形態学特論 器官形態・組織病理学	解剖学は人体の正常な構造を学ぶ学問であるが、構造と機能は極めて密接な関係にある。また、解剖学的基礎知識は病態生理を理解するうえでも重要である。そこで、本分野では人体の構造を肉眼解剖学的・組織学的観点から把握し、人体の構造と機能・病態生理との関連性を学習する。	近藤 照義
		生体機能学特論 臨床免疫学分野	免疫とは自己と非自己（異物）を識別し、非自己を排除する生体防御機構である。非自己は抗原と呼ばれ、微生物、花粉、癌細胞、他人の細胞や臓器などがある。免疫はこれらの抗原を抗体や補体を中心とした液性免疫、および白血球（リンパ球）を中心とした細胞性免疫によって排除し、生体の恒常性を維持している。本分野では、加齢と免疫、ストレスと免疫、感染免疫、癌（腫瘍）免疫、アレルギー、免疫不全症、自己免疫疾患、移植免疫など、臨床免疫学に密接に関わる免疫反応を例にあげ生体の防御機構について学習する。	池脇 信直
		生体機能学特論 再生医療学分野	近年の幹細胞研究の飛躍的な進歩に伴い、幹細胞を用いた組織及び臓器再生の可能性が期待され、皮膚や骨などでは実用化されつつある。幹細胞を用いて失われた細胞を補う細胞補充は、体外から細胞を移植して持ち込む手法と、もともと臓器内に存在する内在性幹細胞を用いる手法とに区別される。本講義では再生能が弱いと考えられている中枢神経系と腎臓における内在性幹細胞の存在やそれらの組織及び臓器再生への関与について学習する。	近藤 照義
		生体機能学特論 薬理・病態生理学分野	運動系、聴覚系、視覚系の多くの障害においては、神経系、内分泌系や免疫系の異常が関連しており、これらの病態生理・生化学および薬物療法を理解することは、保健科学領域における職能向上に大きく寄与する。薬理学特論では、種々の疾病における薬物の有用性を病態生理・生化学に基づいて解析することにより、障害と薬物療法についての理解を深め、高度な理論構築ができるようになることを目的とする。	山本 隆一
		分野別専門選択科目	保健医療技術学特論 I 神経機能学分野	中枢神経系における障害に基づく機能障害の生物学的、発生学的な背景を中心に学習を深めたい。近年の脳神経科学の研究の発展は著しく、臨床業務の合間に個人で学習するにはあまりにも膨大になっている。脳を大きく2つに区分し、行動脳は前頭葉、感覚脳は頭頂・後頭・側頭葉という概念から始まり、中枢神経内に構成される基本的なループとその役割の理解を中心に基礎的学習を目標とする。可能な限り神経科学の最新情報を取り入れ、患者に対する伝統的、経験的なリハビリテーションの意義を正確に把握し、発展させるための基本的な洞察力を涵養する。とりわけ、内因的疾患に伴う小さな障害をも見落とすことなく洞察できる思考力を向上させ、広範なりハビリテーションのカテゴリーとして捕らえる能力を養うことができる医療者の育成に寄与したい。
保健医療技術学特論 I 認知症学分野	本講では認知症の病態像と言うよりは、認知症という状態像をもった個人が精神病的にどのような状態に陥り、われわれがそれをどのように理解していったらよいかを様々な角度から学んでいく。		小川 敬之	

		科目名・分野名	概要	担当教員
特論科目	分野別専門選択科目	保健医療技術学特論Ⅰ 園芸療法学分野	全ての療養は、クライアントがその作業にどれだけ興味・関心を持っているかで効用または効果が大きく異なる。つまりセラピストの実践活動は、いかにクライアントに興味・関心を持たせることができるか否かで、成果が大きく左右されるともいえる。そのような観点に加え、病気や障害および老化による精神の不健全性により懸念される廃用症候群の進行や刺激が減少する五感を、無理なく自然に活用することが可能とされる園芸（療法）の作業療法技法としての活用技術の視点を修得する。高齢者施設を中心に広がりを見せている園芸療法は、精神科医院や発達障害児のための施設などでも作業療法技法として用いることができる。園芸療法がなぜ心身の疾患の緩和・治療に有効なのかをエビデンスに基づいて掘り下げ、その効用を身体的側面、精神的側面、社会的側面、知的側面に分類して考察を深める。	小浦 誠吾
		保健医療技術学特論Ⅰ 小児発達学分野	精神遅滞児は知的能力の障がいのみではなく、大脳皮質の障がいの広がりによって、さまざまな基本的心理特性のほかにも、身体機能の障がいをもたうことが多い。そのために、精神遅滞児の生活指導や訓練、教育にあたってはこれらの理解なしには効果をあげることは困難です。精神遅滞児の養育や訓練、教育に欠かせない基本的心理特性と日常の健康管理に必要な医学的事項についての理解をすすめることを目的とします。	園田 徹
		保健医療技術学特論Ⅰ 運動処方学分野	さまざまな疾患に対して薬治療は行われているが、運動療法に比べ即効性があるものの、副作用も存在する。運動の制限があっても禁忌でない高血圧、糖尿病、高脂血症の患者に対しては、薬治療と運動療法の併用が効果的であるケースも多い。運動療法は理学療法の分野で実施されているが、理学療法士だけでなく医療従事者として生理学的な適応のメカニズムを把握すべきと思われる。本講義では、呼吸・循環器系、骨・骨格筋系に対する一過性の反応について学習するとともに、国内外の研究報告から新しい知見を理解できることを課題とする。したがって、英語論文の和訳も課題に含まれる。	樋口 博之
		保健医療技術学特論Ⅰ 作業療法学分野	リハビリテーションは「障害の学問」でもあることから、適切なリハビリテーション技術の提供は障害に対する正しい知識に基づいて実践されることになる。本科目においては、障害を客観的・科学的に把握し説明することを目的として、ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health）に基づく障害の構造化に取り組んでみたいと考える。また、大学院での学習として研究態度の養成が必要となることから、QOLとの関係から障害の構造化に対する検証方法についても学ぶ機会にしたいと考える。なお、レポート作成にあたっては研究論文作成の準備と位置づけて、必ず関係文献を読んで自分の意見として適切にまとめるよう心がけて欲しい。	福本 安甫
		保健医療技術学特論Ⅱ 高次脳機能・高齢者障害学分野	失語症、記憶障害、注意障害、視空間性障害、失認、失行、遂行機能障害、認知症といった各種の高次脳機能障害について、定義、症候、評価、治療や支援の方法に関する理解を深める。また、加齢による身体、感覚、心理、知能、言語、他の高次脳機能の変化について学び、高齢者に特有の疾患や障害、その対応方法に関する理解を深める。	飯干 紀代子
		保健医療技術学特論Ⅱ 言語発達学分野	言語発達についてさまざまな角度から学習する。それを踏まえて、小児領域の言語聴覚障害について学習した上で、最近注目されつつある発達障害（軽度発達障害を含む）に対して、言語聴覚療法の領域からどのような支援ができるかを考えることを目的とする。	笠井 新一郎
		保健医療技術学特論Ⅱ 聴覚機能学分野	単独または発達障害に合併して生じる聴覚の問題について理解を深めることがねらいである。小児聴覚障害の症状・特徴、原因、評価・診断の基礎を学習した上で、聴覚の発達、新生児聴覚スクリーニング、母子支援プログラムを取り上げ、専門的知識と臨床的対応について学ぶ。まず、近年の研究で明らかになった胎児期および乳幼児期の聴覚の発達について整理する。次に、自動ABRやOAEによる新生児聴覚スクリーニングの現状について理解を深める。これらの学習を踏まえて、乳幼児期の母子支援プログラムについて検討し、小児聴覚障害の臨床および研究に携わる専門家の役割について考察する。	倉内 紀子
		保健医療技術学特論Ⅱ 構音・高次脳機能学	発声発語のメカニズムの理解には、呼吸・発声・共鳴・構音の各レベルにおける複雑な運動と、出力された音響学的現象、音素やアクセント・イントネーションの超分節的要素を含む音声学の知識等、幅広い知識を必要とする。一方、失語症を含む高次脳機能障害の理解には、研究における歴史的背景や各高次脳機能障害の定義、症候の特徴、関与する脳機能とその発現機序、治療法のもつ理論的背景等についての理解が必要となる。本講では、各々の障害に関する知識を系統的に学習することを通して、自己の専門職の立場からの発声発語・高次脳機能障害に対する対応の方法やその役割について考察する。	原 修一
		保健医療技術学特論Ⅱ 言語聴覚学	各種のコミュニケーション障がいおよび情報障がいについて、治療・訓練・補償・代償等の手段や手続きに関する理解を深めることを目的とする。これらの障がいについて、まず、関与する感覚モダリティ別あるいは運動機能別、対応策のコストパフォーマンス、QOLなど、各種観点から分析を行う。そうした分析に基づき、より効果的な支援方法や対応方法について考察し、各自の専門職としての臨床活動においても活用することを想定して検討する。	山田 弘幸
		保健医療技術学特論Ⅲ 視能学分野	人の情報伝達では、その約80%が視能（視覚・視機能）に拠るといわれ、高度情報化社会において一人一人のQOLを創るためにも、視能のハビリテーション・リハビリテーションの意義は大きい。視能の障害は出生直後からの視的学習の途上で、視能を阻害する因子が加わると容易に中枢性の抑制が起こることを含む。本講では、人の各種の障害に対するハビリテーション・リハビリテーションの概要を学習することにより、その中での視能矯正（視機能障害に対するハビリテーション・リハビリテーション）の位置づけと特異性を知る。更に新国際障害分類を知り視能障害におけるリハビリテーションのあり方を学習することにより、これからのリハビリテーションのあり方を考察できる能力を培う。	内田 冴子
保健医療技術学特論Ⅲ 視能検査学分野	視能障害の病態評価のための視能検査には、運動量計測、反応値計測、応答パターン解析などの機能検査や、バイオメトリ、画像解析など多岐にわたる。保健医療技術学特論Ⅲ（視能検査学分野）では、視能障害の病態評価に必要な視能検査についての理解を深め、種々の視能検査の必要性や有用性について理論構築ができるようになることを目的とする。	内川 義和		

		科目名・分野名	概要	担当教員
特論科目	分野別専門選択科目	保健医療技術学特論Ⅲ 視能障害学分野	白内障、緑内障や糖尿病網膜症などの眼疾患に伴う視機能障害が、日常生活機能に及ぼす影響について理解を深めることを目的とする。中高齢者および小児でみられる眼疾患について、定義、臨床症状・特徴を整理した上で、疾患に伴う視機能障害が日常生活機能に及ぼす影響、視機能障害と健康関連QOL(Quality of Life)との関連性について文献調査を行う。	岡野 真弓
		保健医療技術学特論Ⅲ 視能解剖学分野	視能に関する解剖学をくわしく学ぶ。ここでは、視能に関する神経系と眼球と眼球付属器の構造について詳細に記述された英文教科書を読み、レポートを作成する。読む範囲については、それぞれの専門分野に直接的あるいは間接的に関連する部分を選ぶ。こうして、その分野に関連する詳細な解剖学的知識を習得すると同時に、英文を読む力をつける。	川野 純一
		保健医療技術学特論Ⅲ 視能生理学分野	良質で快適な視覚を得るために、視覚に関与する眼球、眼球付属器、脳は非常に精緻にして合理的な機構を備えている。網膜、視神経から、視路、視中枢、高次中枢といった視覚に直接関与する視覚神経回路のみならず、眼球運動は、視覚を適切な条件で作動させるのに必須なものであるし、眼瞼、瞳孔、毛様体の運動もそれを補完している。そういう機構に障害がおきれば、神経眼的病気が発生する。神経眼科臨床の基礎である視覚のメカニズムの理解を深めるために、神経・電気生理学的な文献の講読や研究方法などに関する課題研究を行う。	山下 由朗
		保健医療技術学特論Ⅳ 人工臓器学分野	現在生体に用いられている広義の人工臓器関連装置としては、人工内耳、人工声帯、人工心臓、人工心臓、人工腎臓、人工膵臓、人工関節、人工血管、人工皮膚が挙げられる。また、人工筋肉的な装置としてパワースーツが市販されるようになっており、一昔前のサイボーグが現実化しつつある。本分野ではこれらの中から各自が興味を持っている内容について調査、レポートとしてまとめ、科学技術の今後のあり方について意見を述べることを目的とする。	竹澤 真吾
		保健医療技術学特論Ⅳ 医療機器安全管理学分野	医療において診断監視装置、治療機器などの医療機器の進歩はめざましいものがあり治療効果をあげている。これらの医療機器は、各々単独で使用する場合は、安全性に関する問題点は少ないものの、複合的に使用すると相互干渉を起こし、トラブルが発生し最悪の場合は患者へ被害を与えることとなる。医療機器を安全に使用するためには、それぞれの機器の特性、使用環境、使用方法などをシステムとして検討する必要がある。本講義では、医療機器を使用する上での環境についての安全性に対し理解を深めることとする。	戸畑 裕志
		保健医療技術学特論Ⅳ 生体機能代行装置学分野	人体の持つ生理的機能を医療機器を通して補い、代行することで、QOLの改善が望めることが大きな利点であると共に、各臓器を完全に代行するには至らないための欠点が現時点では存在する。またその対面には、移植医療というのが存在する。ここでは、生体機能代行装置についての総論として、関連文献(英語)を通読し、その歴史的背景から、現在、未来からの観点より、臨床工学技士というプロフェッショナルとしてどうあるべきなのかを、学習していく。	吉武 重徳
演習科目		保健医療技術学演習Ⅰ 神経機能学分野	中枢神経機能の運動系への関与を手の発生学的な背景を中心に学習を進める。行動脳に対する感覚脳・旧皮質系の関与、発達途上における手の機能の発達やその役割の理解を中心に基礎的学習を目標とする。神経科学の最新情報に基づき、障がいの原因の科学的裏づけとなる洞察力を養わない特別研究の考察力へと発展・応用を考えている。教科書は英語であることから、修士レベルの英語の読解力も要求される。	岩本 壮太郎
		保健医療技術学演習Ⅰ 認知症学分野	近年、医学診断の技術や検査機器の進歩により一昔前まで単純に「認知症」といわれていた疾患が、アルツハイマー型認知症、脳血管性認知症、レビー小体型認知症、前頭側頭型認知症など脳機能低下の局在性にもなう特異な症候を呈することがわかってきた。そうした最近の知見をもとに臨床場面で遭遇することの多い認知症のタイプ別の症候について理解する。また、自分が臨床などで関わりを持った認知症の症候の整理も行っていく。	小川 敬之
		保健医療技術学演習Ⅰ 園芸療法学分野	精神科病院、療養型病院、リハビリテーション病院、老人保健施設および発達障害児や心身の障害者にかかわる施設のうちの箇所を自由に選択し、作業療法技法として園芸療法を実践するモデルケースを体験し、実践しなければ理解できにくい活動の意義を修得する。具体例として、 ①使用できる花壇等の設備の事前状況判断 ②根拠(エビデンス)を実証するための評価方法の検討(施設独自の評価表作成) ③他の作業療法技法と異なる特徴を整理 ④様々な障害および病状のクライアントが活動をしやすいように花壇および園芸用具(自助具)を工夫する	小浦 誠吾
		保健医療技術学演習Ⅰ 小児発達学分野	精神遅滞児の訓練、教育は、初期の生活指導や行動療法などから、特殊なものとしては自閉性障害にもちいられるTEACH法などにいたるまで、それぞれの専門家によっておこなわれています。これらの方法の概要を脳科学をふくめた生物医学的視点と基本的心理学特性の視点から理解します。 精神遅滞児の生活指導や訓練、教育への医学的視点からのアプローチと精神遅滞の治療、予防についての概要を理解することを目的とします。また、放置していれば精神遅滞を合併してくる疾患の治療や合併する異常の基礎を、精神遅滞児の訓練や教育にたざさわる人たちに必要な範囲で習得します。	園田 徹
		保健医療技術学演習Ⅰ 運動処方学分野	リハビリテーション分野、また予防医学分野において運動療法が積極的に行われるようになってきている。その背景として、医療法第42条施設の設置があげられる。42条施設とは、医療法人付帯の運動施設であり疾病の予防を目的として認可を受けたものである。また平成20年4月より、特定検診・特定保健指導が義務化され、運動療法では42条施設が利用されると思われる。運動療法は医師の診断のもと、運動処方箋が作成され、理学療法士や健康運動指導士が担当する。本講義では、運動療法の効果だけでなく、栄養指導や薬治療の併用による効果について臨床研究を中心に、学習する。保健医療技術学特論Ⅰと同様に、英語論文の和訳も課題に含む。	樋口 博之

		科目名・分野名	概要	担当教員
演習科目	分野別専門選択科目	保健医療技術学演習Ⅰ 作業療法学分野	本科目は保健医療技術学特論Ⅰ（作業療法学分野）に関連するものであり、特論Ⅰで学んだ「障害とQOL」を基礎として具体的検証方法を学び、研究者としての基礎的態度を養うことを目的とする。このため、多種多様の障害像を呈する中枢神経系疾患を取り上げ、障害の構造化とその客観的検証を具体例によって実践し、リハビリテーションのevidenceのあり方について考える機会にする。なお、レポート作成にあたっては研究論文作成の準備と位置づけて、必ず関係文献を読んで自分の意見として適切にまとめるよう心がけて欲しい。	福本 安甫
		保健医療技術学演習Ⅱ 高次脳機能・高齢者障害学分野	保健医療技術学特論Ⅱにおいて習得した、失語症、記憶障害、注意障害、視空間性障害、失認、失行、遂行機能障害、認知症といった各種の高次脳機能障害、また、高齢者に特有の疾患や障害に関する知識をもとに、自分の専門分野の特性を活かした、より効果的な評価、あるいは治療や支援の方法を考察することを目的とする。	飯干 紀代子
		保健医療技術学演習Ⅱ 言語発達学分野	保健医療技術学特論Ⅱで学んだ知識をもとに、小児領域の言語聴覚障害（軽度発達障害を含む）の中から、一障害を取り上げて、評価、訓練・指導について詳細に検討し、新たな知見を見いだせるような試みを考えることを目的とする。	笠井 新一郎
		保健医療技術学演習Ⅱ 聴覚機能学分野	聴覚障害領域の最新のトピックの中から人工内耳を取り上げ、研究の歴史、現状、課題、展望について知識と理解を深める。とくに、小児人工内耳の術前・術後の（リ）ハビリテーションについて学ぶ。まず、小児人工内耳の意義と課題について整理し、人工内耳の効果に関連する要因の検討を行う。次に、聴取能力、言語・コミュニケーション能力、発声発語能力の観点から、人工内耳埋め込み後の長期成績を分析する。さらに、英文論文を含めた複数の論文の抄読を通して、研究の動向について考察する。	倉内 紀子
		保健医療技術学演習Ⅱ 構音・高次脳機能学分野	音声言語・高次脳機能障害の関連領域よりテーマを選択し、関連する文献を検索・精読・整理し、テーマに関する理解を深める。また、文献にて用いられている研究手法や分析法を検討し、各自の研究デザインや分析方法のイメージ作り・確立をはかる。テーマに関連する雑誌には日常的に検索し、目を通しておく必要がある。	原 修一
		保健医療技術学演習Ⅱ 言語聴覚学分野	「保健医療技術学特論Ⅱ」において習得した知識をもとに、各種のコミュニケーション障がいおよび情報障がいについて、治療・訓練・補償・代償等の手段や手続きに関する文献精読、課題演習等を行う。これらの障がいについて、各自の専門職としての立場から、より効果的な支援方法や対応方法について考察することを目的とする。	山田 弘幸
		保健医療技術学演習Ⅲ 視能学分野	本講では、視能学分野における保健・医療・福祉の領域について臨床例を選択し、高度かつ集約的に検討する。即ち、選択テーマの文献検索、研究デザイン、エビデンスの明示、考察を行い、課題解決能力、研究のまとめと表現能力を培う。これらを学習することにより、臨床でより論理的、効果的な問題解決が行え、生涯教育に寄与できる能力を養う。	内田 冴子
		保健医療技術学演習Ⅲ 視能検査学分野	視能障害の病態評価のための視能検査には、運動量計測、反応値計測、応答パターン解析などの機能検査や、バイオメトリ、画像解析など多岐にわたる。保健医療技術学特論Ⅲ（視能検査学分野）で学んだ、視能障害の病態評価に必要な視能検査についての理解を基に、種々の視能検査の有用性について検証、考察できるようになることを目的とする。	内川 義和
		保健医療技術学演習Ⅲ 視能障害学分野	保健医療技術学特論Ⅲで習得した知識をもとに、中高齢者および小児でみられる眼疾患に対する評価、治療および支援方法についての理解を深めることを目的とする。国内外の文献調査を通して、眼疾患に対する評価、治療および支援方法についての最新の知識を習得するとともに、自身の専門領域で、より効果的な評価、対応および支援の在り方を考察する。	岡野 真弓
		保健医療技術学演習Ⅲ 視能解剖学分野	視能に関する神経系と眼球と眼球付属器の構造の中から、それぞれの専門分野に関連する数項目を選び、それらについての英文文献を用いて、批判的に読む訓練を行う。レポートでは、英文文献の内容を正確に把握した上で問題点を指摘し、その問題点について議論することが求められる。	川野 純一
保健医療技術学演習Ⅲ 視能生理学分野	特論Ⅲにおいて学習した知識を基に院生がテーマを設定し、研究を進めていく。具体的には、視能に関与する眼球、眼球付属器、脳の中から神経・電気生理学分野に関するテーマを選び、文献検索・精読してテーマについての理解を深め、かつ各自が行える研究手法や分析法を確立する。最新の情報を得るために文献検索は日常的に行うことが大事である。	山下 由朗		

		科目名・分野名	概要	担当教員
演習科目	分野別専門選択科目	保健医療技術学演習Ⅳ 人工臓器学分野	保健医療技術学特論Ⅳでは人工臓器の内容についての調査だが、本演習では各自が興味を持っている人工臓器の具体的な操作方法、治療条件とその結果について調査、レポートとしてまとめる。病院、クリニック勤務者は各自の施設内でのデータを活用し、今後の医療活動に役立てるよう配慮する。たとえば、血液透析の場合には使用するダイアライザーの特徴、適応患者、通常の血液透析やオンライン血液透析濾過などの治療条件による違いを明確にし、自らの意見を確立、血液透析療法のあるべき具体的な姿が述べられるようにレポートを組み立てていく。	竹澤 真吾
		保健医療技術学演習Ⅳ 医療機器安全管理学分野	医療において生命維持管理装置をはじめとする治療機器や診断監視装置類の進歩はめざましく、高度先端医療では、これらの医療機器が同一患者に複数使用される。保健医療技術学特論Ⅳにおいては、医療機器を使用する上での全体像を把握するために使用環境を中心に検討したが、本演習では、さらに理解を深めるために個々の医療機器（診断監視装置類、治療機器類）を使用する上での個別の問題点について詳細な検討を行う。	戸畑 裕志
		保健医療技術学演習Ⅳ 生体機能代行装置学分野	生体機能代行装置学の総論的なことを十分に把握していることを前提に、科学的に事象を分析して、客観的に批評できるような思考を形成することを目標とする。臨床工学技士として得意な生体機能代行装置（ひとつまたは、複数可能）に関して、立案、データ収集、結果作成、考察までの一連の流れを参考英語論文等を通読、精読して、その手技を学習する。最終的には、医療の臨床現場の中で、臨床工学技士という個々のまた、集団としてのプロフェッショナル性を確立する。	吉武 重徳
総合科目		保健科学特別研究	研究を行うのに必要な手続きや手法について、院生を指導し、院生の研究の成果を論文として纏める。具体的には、修士論文作成のための先行研究について指導を行い、学生の思索能力を高める。文献の講読を行いながら、仮説を立案し、リサーチを行う院生に調査の計画と実行について、その進捗状況に沿って集中的に必要な指導と援助を行う。	飯干 紀代子 池脇 信直 岩本 壮太郎 内川 義和 内田 冴子 大津 隆一 岡野 真弓 小川 敬之 笠井 新一郎 川野 純一 倉内 紀子 小浦 誠吾 近藤 照義 園田 徹 竹澤 真吾 戸畑 裕志 原 修一 樋口 博之 福本 安甫 松山 光生 矢花 美美子 山下 由朗 山田 弘幸 山本 隆一 吉武 重徳